

【個人研究】

改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケートと 魅力度に関する実証的研究

三浦 文子*

Empirical study of the Revised
Encounter Group Session Questionnaire (EGSQ-R) and attractiveness

Fumiko MIURA

The current study administered the Revised Encounter Group Session Questionnaire(EGSQ-R)and measured attractiveness to ascertain the experience of members of a structured encounter group(SEG).

The purposes of this study were:(1) to verify the factor structure of the EGSQ-R, (2) to ascertain the relationship between attractiveness with the EGSQ-R, and (3) to ascertain the effects of the EGSQ-R on attractiveness.

Results indicated the following: (1)The EGSQ-R has a 4-factor structure: “Comfort with the group,” “Self-understanding and understanding of others,” “Involvement,” and “Acceptance by others.” (2)The EGSQ-R and attractiveness were related except in some aspects of “Acceptance by others.” (3)“Self-understanding and understanding of others” and “Comfort with the group” of the EGSQ-R affected attractiveness.

Key words : Revised Encounter Group Session Questionnaire, attractiveness, structured encounter group (SEG), improvisation, co-facilitator

改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート、魅力度、構成的エンカウンター・グループ (SEG)、インプロヴィゼーション、コ・ファシリテーター

I. 問題と目的

継続型のグループ・アプローチにおいては、メンバーそれぞれがどのようにグループ体験をしているか、またどのようなことに満足し、不満足に思っているかなどを把握して次のセッションに活かすことが必要である。メンバーがどのようにグループを体験をしているかについて、ファシリテーターはセッション中にメンバー個人の言動を観察しながら、かつグループ全体について滞りなくファシリテーションしていくことが求めら

れる。構成度の低い非構成的エンカウンター・グループ (以下EG) では、ファシリテーターが直接メンバーと関わるためメンバーの体験を理解しやすいが、構成度の高い構成的EGのようにメンバーが数十人規模になると、ファシリテーターがメンバー全員に目を向けることは困難になる (坂中・高橋、2009)。また、メンバーの体験がすべて語られるわけではなく、観察だけで知り得る情報は限定される (坂中・高橋、2009)。

そこで、グループ中に把握できなかったメンバー個人の様子をより詳細に把握するために、セッション後に自己報告式のアンケートを行うこ

* みうら ふみこ 文教大学人間科学部臨床心理学科

とがある。グループ・アプローチのアンケートには、大別するとグループの効果測定を目的とするものと、メンバーの体験の把握を目的とするものがある。

前者については、村山ら(1979)は、集中的グループ研究の効果研究について、アンケート法、心理テスト法、面接法、事例研究法の4つに分類している。野島(2000)によると、非構成的EGの効果研究には、アンケートを用いたもの、心理テストを用いたもの、面接法によるもの、事例研究法によるものなどが行われており、構成的EGの効果研究には、YG、UPI、進路意識自己肯定感、自己概念等を用いたもの、アンケートを用いたもの等が行われている。また、構成的なグループの効果を測定する尺度として、水野(2013)はグループ体験を通じての心理的成長感を測定するSGE体験評価尺度を作成している。構成と非構成の中間に位置づけられる半構成的なグループの効果研究としては、浅井(2020)が自己と他者への態度変容という点から測定する尺度を作成している。

後者については、エンカウンター・グループではセッション後に「セッション・アンケート」として、福岡人間関係研究会を中心にEG実践の中で活用されてきたフォーマットがある(野島、1982)。この「セッション・アンケート」は自由記述式に加えて、量的に把握できるセッションの魅力度を尋ねる1項目から構成されている。「セッション・アンケート」は、構成・非構成双方で活用可能な汎用性のあるアンケートで、ファシリテーターがメンバーの体験を把握しつつ、次のセッションの方針を考える上で大いに参考になり、またメンバーにとっても、自身の体験を振り返り体験を自分の中に位置づける上で大いに役立つ(坂中・高橋、2009)。坂中・高橋(2009)は、メンバーのセッション体験を数量的に把握できる項目を加えて、次のセッションのファシリテーションの指針となる指標として、構成・非構成双方で活用可能な汎用性のある改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート(以下EGSQ-R)を作成している。EGSQ-Rは多くの項目が魅力度と中程度以上の相関を持つことが確認されているが、因子構造を確認した上での魅力度と

の関連性については検討されていない。

水野ら(2019)は、グループに参加したすべての人が、グループ体験に魅力を感じ、好意的であるとは限らないとして、構成的なグループにおいて魅力度を指標に、魅力を感じた者とあまり感じなかった者との違いについて検討している。しかし、年齢が20代から50代と幅広く、また人数も15名と少ない。

メンバーの体験を把握して、次のセッションに活かしていくためには、観察および魅力度などの数量的資料を含むアンケートを手がかりにしながら、諸々の要因も考慮する必要があるだろう。グループの展開に大きな影響を与える要因としては、メンバー、ファシリテーター、プログラム(村山、1979)、そしてコ・ファシリテーター関係の要因(林、1990)が上げられている。本稿では、メンバーの体験を把握するための毎回のセッション・アンケートの数量的データと自由記述とをあわせて、グループの展開に影響を与える要因について検討する。

本稿で対象としたグループの特徴として、プログラムのエクササイズにインプロヴィゼーションのゲームを取り入れたことと、複数のコ・ファシリテーター方式であったことがあげられる。インプロヴィゼーションは、“既成概念にとらわれないで、その場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、今の瞬間を生き活きと生きながら、仲間と共通のストーリーをつくっていく能力のこと”と定義され、幅広い領域で用いられており、大人から子どもまで、俳優を志す人からコミュニケーションのテクニックを身につけたい社会人まで誰でもできる上に、子どもの遊びのような楽しさがある(絹川、2002)。インプロヴィゼーションを演劇以外で応用的に使う活動は応用インプロ(Applied Improvisation)と呼ばれている(中小路・絹川、2015)。「応用インプロ」は、演劇以外の領域にインプロの要素を使って、教育に活かしたり、人間の成長を目的とする(絹川、2017)。応用インプロは他のグループ・アプローチの技法にはない「表現する」と「創造する」という点が特徴的である(三浦、2020)。

「コ・ファシリテーター方式」とは、研修生が

コ・ファシリテーターとして、ベテランのファシリテーターと共同して実際のグループを担当することである(野島, 1985)。本稿では、このようなグループの特徴についても合わせて検討を行うこととする。

本稿では、大学生対象の構成的EGの参加メンバーの体験を把握するために測定した、EGSQ-Rと自由記述、魅力度を用いて、(1)EGSQ-Rの因子構造を確認した上で、(2)EGSQ-Rによる効果の測定および魅力度との関連について、(3)EGSQ-Rが魅力度に与える影響についてについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者

A県私立B大学の学部の選択授業である「グループ・アプローチ」(1回90分)参加者大学生3・4年生の男女57名。

2. グループの構造

授業は半期15回で、1回目の授業ではグループ・アプローチについてレクチャーを行い、この授業の内容および目標について説明した。授業の2回目以降から構成的なセッションを行った。セッションは全14回、参加者数の平均は45.71名($SD=3.83$)であった。グループのファシリテーター(以下Fac)は筆者(授業担当教員、女性)、そしてコ・ファシリテーター(以下CoFac)としてCoFacA(修士2年生、20代女性)とCoFacB(修士2年生、20代男性)が担当した。三浦(2019, 2020)ではMeの自発性を促すために体育館でのSeを取り入れており、Meの魅力度が高く意欲的に参加できていたことから、本稿においてもセッション4とセッション11は体育館で行った。セッション12はCoFacAが、セッション13はCoFacBがメインとなってエクササイズサイズのファシリテーションを担当した。最終回のセッション14では、半構成的EGのテーマセッション方式を取り入れた。

3. 調査内容

(1) 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート(EGSQ-R)

坂中・高橋(2009)の計13項目、7件法。毎セッ

ション後に実施。

(2) セッション・アンケート

自由記述式の感想と「あなたは今日のグループ・アプローチにどのくらい魅力を感じましたか」という魅力度を尋ねる1項目、7件法。毎セッション後に実施。

なお、本グループにおいては、グループ開始前とグループ開始後に、坂中が作成した改訂版自己実現スケール(SEAS2000)24項目の測定と参加者カードへの記入を求めたが、本研究の目的からは外れるため詳細について割愛する。グループ・プロセスとアンケートは、個人情報に配慮した上で研究発表や論文で報告する可能性があることを伝え同意を得た。

4. 調査時期および手続き

EGSQ-Rおよびセッション・アンケートについては2019年4月～7月の毎セッション終了後、一斉に実施して回収した。所要時間は10分程度であった。

III. 結果

1. 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート(EGSQ-R)の因子構造について

EGSQ-Rの13項目について平均値、標準偏差を算出した。天井効果、フロア効果を示す項目はみられなかった。13項目について因子分析を行った。スクリープロットで第4固有値と第5固有値との間にギャップがみられ、因子の解釈可能性からも4因子構造が妥当であると考えた。そこで、4因子を仮定して因子分析を行った。一般化された最小2乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析結果をTable1に示す。

第1因子は5項目で構成されており、自分を十分に表現した、グループにまとまりを感じた、安心感を感じたなどのグループの中で安心して過ごせる状態を表す項目に負荷量が高いことから、「グループの居心地」因子と命名した。第2因子は4項目から構成され、他の参加者に向き合えた、他の参加者に親近感を感じた、自分に向き合えた、他の参加者へ配慮したなど自己や他者への理解が進む様子を表していることから、「自己理解・他

Table1 EGSQ-Rの因子分析結果

項目	I	II	III	IV	共通性
I グループの居心地($\alpha = .89$)					
E02 自分を十分に表現した	.96	-.20	.19	-.05	.94
E13 グループにまとまりを感じた	.91	-.05	-.06	.21	.77
E01 安心感を感じた	.66	.28	.08	-.04	.88
E11 疲れを感じた*	.62	.20	-.17	-.20	.66
E05 グループ活動を(無理やり)やらされた*	.45	.16	.34	.02	.69
II 自己理解・他者理解($\alpha = .82$)					
E10 他の参加者に向き合えた	.08	.92	-.10	.02	.86
E12 他の参加者に親近感を感じた	-.06	.73	.21	.01	.80
E09 自分に向き合えた	.08	.69	-.17	-.04	.52
E08 他の参加者へ配慮した	-.14	.55	.32	.05	.69
III 関わり($\alpha = .84$)					
E04 グループ活動に積極的に取り組んだ	.04	-.15	1.06	-.05	1.00
E03 他の参加者へ積極的に関わった	.07	.25	.58	.03	.78
IV 他者からの受容($\alpha = .56$)					
E06 ファシリテーターからの配慮を感じた	.19	-.03	-.21	.78	.64
E07 参加者からの配慮を感じた	-.21	.06	.21	.61	.53
因子相関行列	I	II	III	IV	
	II	.55	.45	-.13	
	III		.58	.13	
	IV			.01	

*は逆的項目

者理解」因子と命名した。第3因子は2項目から構成され、グループ活動に積極的に取り組んだ、他の参加者へ積極的に関わったという項目から構成されており、グループやメンバーへのコミットメントを表していることから、「関わり」因子と命名した。第4因子は2項目から構成され、ファシリテーターからの配慮を感じた、参加者からの配慮を感じたという項目から構成され、ファシリテーターおよびメンバーから受入れられているという感覚を表していることから、「他者からの受容」因子と命名した。

次に、各下位尺度に相当する項目の内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「グループの居心地」で $\alpha = .89$ 、「自己理解・他者理解」で $\alpha = .82$ 、「関わり」で $\alpha = .84$ と十分な

値が、「他者からの受容」で $\alpha = .56$ とやや低い値が得られた。尺度全体については、 $\alpha = .87$ であり、十分な値であった。このことから、下位因子「他者から受容」の内的整合性については十分とはいえないが、EGSQ-Rは尺度全体としてはある程度の内的整合性を有することが示された。

2. 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート(EGSQ-R)による効果の測定および魅力度との関連について

EGSQ-Rについて、初回の1セッション目と最終回の14セッション目について対応のある t 検定を行った。その結果をTable2に示す。

EGSQ-Rの下位因子である「グループの居心地」($t(42) = 4.55, p < .001$)と「自己理解・他者理解」($t(42) = 3.92, p < .001$)、「関わり」($t(42) = 4.16$ 、

Table2 グループ初回と最終回のEGSQ-Rの *t* 検定結果

	初回 (1セッション)		最終回 (14セッション)		<i>t</i>
	平均	SD	平均	SD	
グループの居心地	26.84	5.22	30.42	4.23	-4.55 ***
自己理解・他者理解	22.30	3.29	24.09	3.41	-3.92 ***
関わり	11.02	1.87	12.44	1.58	-4.16 ***
他者からの受容	10.67	1.69	11.63	1.81	-3.02 **
EGSQ-R合計得点	70.84	9.20	78.58	9.60	-5.53 ***

p* < .01, *p* < .001

Table3 セッションごとのEGSQ-Rと魅力度の相関分析結果

	グループの居心地	自己理解・他者理解	関わり	他者からの受容	EGSQ-R合計
Se1	.66*	.73**	.61**	.04	.80**
Se2	.79**	.70**	.62**	.36*	.82**
Se3	.64**	.60**	.59**	.39**	.69**
Se4	.83**	.79**	.65**	.62**	.88**
Se5	.42**	.59**	.64**	.25	.57**
Se6	.62**	.76**	.72**	.59**	.79**
Se7	.85**	.58**	.63**	.54**	.80**
Se8	.80**	.67**	.78**	.43**	.80**
Se9	.53**	.49**	.54**	.08	.56**
Se10	.78**	.72**	.56**	.54**	.82**
Se11	.69**	.66**	.71**	.55**	.75**
Se12	.55**	.53**	.34*	.24	.55**
Se13	.71**	.53**	.63**	.22	.70**
Se14	.76**	.76**	.73**	.41**	.81**

***p* < .01 **p* < .05

p < .001)、「他者からの受容」($t(42) = 3.02, p < .01$)について初回よりも最終回のほうが有意に高い得点を示した。また、EGSQ-R全体としても初回よりも最終回のほうが有意に高い得点を示した ($t(42) = 5.53, p < .001$)。

次に、EGSQ-Rと「魅力度」の関連性を検討するために、セッションごとに相関を調べた。その相関分析の結果をTable3に示す。

EGSQ-Rの尺度得点と「魅力度」については、セッション全てにおいて $r = .55 \sim r = .88$ と有意な正の中程度から強い相関がみられた。さらに、EGSQ-Rの下位尺度の「グループの居心地」、「自

己理解・他者理解」、「関わり」と「魅力度」についてはすべてのセッションで有意な相関がみられたが、「他者からの受容」と「魅力度」については、Se1、Se5、Se9、Se12、Se13で有意な相関はみられなかった。

各セッションの内容とEGSQ-R、魅力度についてはTable4に示す。

3. 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート (EGSQ-R) が魅力度に与える影響について

「グループの居心地」、「自己理解・他者理解」、「関わり」、「他者からの受容」によって、セッション

Table4 各セッションの内容とセッションごとのEGSQ-R、魅力度

参加人数	エクササイズ	MeのEGSQ-R		Meの他者からの受容		Meの魅力度		CoFacの魅力度	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	CoFacA	CoFacB
Se1 (N=53)	イメージ・フィードバック 好きな言葉を添えて自己紹介	70.37	9.50	10.67	1.73	6.00	0.95	6	6
Se2 (N=50)	サイコロトーク なりきり似顔絵捜査官	69.58	9.11	10.67	1.95	5.66	0.99	7	5.5
Se3 (N=48)	妄想自己紹介 100人の村	73.35	8.54	11.29	1.62	5.94	0.97	7	7
Se4 (N=47)	呼びかけのレッスン 創句	71.64	10.51	11.30	1.76	5.74	0.96	7	6
Se5 (N=45)	ノンバーバル絵画	71.40	10.30	10.89	2.03	5.96	0.79	7	6
Se6 (N=45)	アサーション初級編	72.60	9.88	11.16	1.62	5.82	0.88	7	6
Se7 (N=49)	ほめトレ アサーション中級編	74.02	9.59	11.29	1.50	5.94	0.91	7	6
Se8 (N=37)	アサーション応用編	72.06	9.24	11.17	1.78	5.78	0.85	7	7
Se9 (N=46)	何と言っているでしょう？ ワン・ワード	74.76	7.97	10.93	2.13	6.20	0.71	6	7
Se10 (N=45)	プレゼント・ゲーム アクティブ・リスニング①	74.53	9.15	11.43	1.69	5.95	0.85	7	7
Se11 (N=47)	ジェスチャーゲーム ボディーワーク エモーションナル・リプレイ	73.72	11.06	11.34	1.65	6.11	0.9	5	7
Se12 (N=41)	カード・トーキング (CoFac) アクティブ・リスニング②	76.88	8.44	11.54	1.53	6.10	0.73	7	7
Se13 (N=42)	われら〇〇族 (CoFac) アクティブ・リスニング③	75.07	8.06	11.45	1.50	6.02	0.77	7	7
Se14 (N=45)	アクティブ・リスニング④ 半構成法式テーマ・ セッション 「私の過去・現在・未来」	78.80	9.51	11.71	1.82	6.38	0.85	7	7

の「魅力度」がどの程度説明できるか検討するため、セッション1の「グループの居心地」・「自己理解・他者理解」・「関わり」・「他者からの受容」を独立変数、セッション1の「魅力度」を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。相関行列を確認したところ、 $|r| > .80$ の値をとる変数はみられなかったためすべての変数を対象とした。結果をTable5に示す。

「関わり」と「他者からの受容」因子については分析から除外された。分散分析の結果、 $p < .01$ の水準で有意であった。調整済みR2は.63であったため適合度は比較的高いことが示された。

「自己理解・他者理解」の標準偏回帰係数($\beta = .53$, $p < .001$)、「グループの居心地」の標準偏回帰係数

Table5 EGSQ-Rの下位因子を独立変数、魅力度を従属変数とする重回帰分析の結果

	魅力度	
	β	t
自己理解・他者理解	.53	5.04***
グループの居心地	.38	3.60***
R	.80	
R2	.64	
Adj. R2	.63	

*** $p < .001$

($\beta = .38$, $p < .001$) が有意であった。

Variance Inflation Factor (VIF) を算出したところ、VIFは最も高い値が1.76であった。小塩(2018)は $VIF > 10$ であると多重共線性が発生し

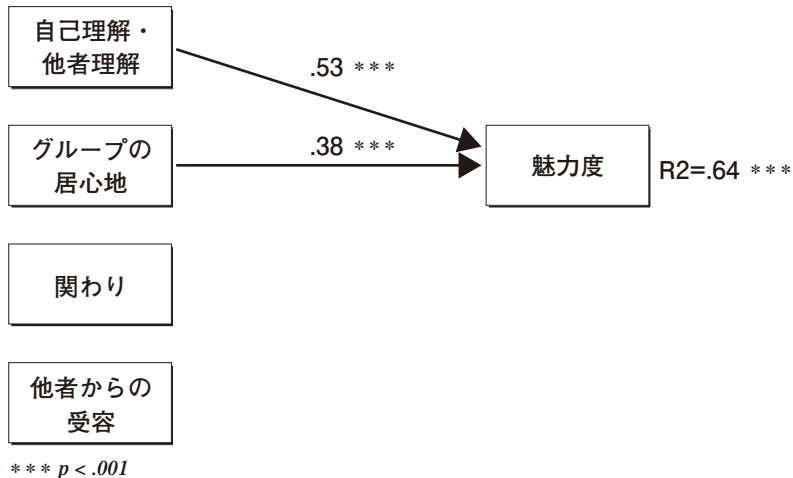


Figure1 EGSQ-R の下位因子を独立変数、魅力度を従属変数としたパス図

ているとしており、本研究においては多重共線性の問題は認められないと判断した。

変数の正規性について確認するため、Shalopi-Wilk検定を行ったところ、有意水準.93と有意でなかったため、正規性を仮定できると判断した。Durvin-Watson比は2.02であったため残差はランダムである可能性が高いと判断した。また、実測値に対して $\pm 3SD$ の値をとる外れ値も見られなかった。

重回帰分析の結果から作成したパス図をFigure1に示す。

IV.考察

1. 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート (EGSQ-R) の因子構造について

EGSQ-Rの因子分析の結果から、EGSQ-Rはグループの中で安心して過ごせる状態を表す「グループの居心地」、自己理解や他者理解が進む様子を表す「自己理解・他者理解」、グループ活動に積極的な関与を表す「関わり」、ファシリテーターやメンバーから受容されていると感じていることを表す「他者からの受容」という4因子構造であることが示唆された。

各下位尺度の α 係数について、「グループの居心地」、「自己理解・他者理解」、「関わり」では $\alpha = .80$ 以上と十分な値であったが、「他者からの受

容」では $\alpha = .56$ とやや低い値であった。信頼性が低いと、検定における検出力が低くなってしまう可能性があるため、項目内容を修正したり項目数を増やしたりなど見直す必要があるだろう。

2. 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート (EGSQ-R) による効果の測定および魅力度との関連について

初回と最終回のEGSQ-Rについて対応のある t 検定を行った結果から、すべての下位因子、尺度全体得点ともに有意に高くなっていった。このことから、グループ体験にある程度の効果があったことが示唆された。

また、セッション全てにおいてEGSQ-Rと「魅力度」の尺度得点が中程度から強い有意な相関がみられたことから、EGSQ-Rと「魅力度」は中程度から強い関連性があることが示された。さらに、魅力度とEGSQ-Rの下位尺度の「グループの居心地」、「自己理解・他者理解」、「関わり」については全セッションで有意な相関がみられ、関連性があることが示された。しかし、「他者からの受容」と「魅力度」については、Se1、Se5、Se9、Se12、Se13で有意な相関はみられなかった。この点について、プログラムの内容、セッション・アンケートの自由記述と合わせて詳細に検討していく。Table3より該当セッションにおいては「他者からの受容」得点が低いことがうかがえるため、該当セッションの魅力度が平均値以上かつ「他者から

の得点」が平均値未満のメンバーの自由記述を抜粋して考察する。

Se1では、非言語寄りでイメージを使い、自己理解・他者理解を目的とした「イメージ・フィードバック」と「好きな言葉を添えて自己紹介」というエクササイズを行った。自由記述からは「相手が不快になっていないか心配」、「相手に対してどこまで踏み込んでいいかわからない」という他者と関わることへの心配がうかがえた。

Se5は非言語で自己理解・他者理解を目的とした「ノンバーバル絵画」というエクササイズを行った。自由記述からは「始めに何を描くかによってその後が決まったので最初の人の絵は重要」という他者の関わり方についての考えと、「自分の絵が下手」という他者からどう見られているか不安である様子がうかがえた。

Se9は、相互受容と創造性を高めることを目的として、紙に書かれた語句を無言で伝えていく「何と言っているでしょう」と、インプロヴィゼーションのゲームである「ワン・ワード」というエクササイズを行った。自由記述からは「自分の思っていた流れとは違ったが、楽しかった」、「ワン・ワードが気になるところで終わってしまったのもっと長くやりたかった」というモチベーションを示す記述が見られた。

Se12では、CoFacAがメインファシリテーターを担当してあらかじめお題が書かれたカードから1枚ひき、それに答える「カード・トーキング」と、アクティブ・リスニングの実習(2回目)をエクササイズとして行った。自由記述からは「教室が暑かった」という環境面の指摘あるいはその場の居心地の悪さの表明についての記述、「感想の時間にもっと深まるような意見が出し合えるとよかった」という他者とのより深い関わりを求める記述がみられた。

Se13では、CoFacBがメインファシリテーターを担当し、小グループで共通点を見つけ出す「我ら〇〇族」(國分・國分、2004を参考)と、アクティブ・リスニングの実習(3回目)をエクササイズとして行った。「共通点でみんな近いものを持っていて安心感やまとまりを感じた」、「〇〇族は発表するだけで時間がかかって共通点を探し出すのは

難しかった」というプラスにせよマイナスにせよ他者との関係に関する記述がみられた。

プログラムとしては、非言語的な内容もしくはゲーム性の高いエクササイズが多いという特徴と、CoFacがメインファシリテーターを担当しているセッションという特徴もうかがえた。非言語的なプログラムの重要性については先行研究で指摘されている(たとえば、水島、1973、安部、2010、三浦、2019など)。しかし、今回の結果からは、非言語的なプログラムが即時的な魅力度にはつながっていなかった可能性がうかがえる。林(1990)は、CoFac関係がうまくいった場合には、CoFac関係がうまくいかなかった場合より、グループの発展段階が高いことを明らかにしている。今回対象とするグループにおいては、毎セッションCoFacがメンバーと交流するというわけではなく、1人がグループ全体を見てサポートを行い、1人が小グループに入ってメンバーと直接交流するという形式をとったため、CoFacとメンバーが交流する機会が限定的であった。CoFacがエクササイズをメインで担当するにあたっては、メンバーと交流する機会を多くもうける必要があっただろう。

自由記述からは、他者と関わることや他者からどう見られているか不安である様子や、他者と関わることの難しさがみられた。また、もっと他者と話したい、深く関わりたいという欲求がうかがえた。ポジティブ感情は、特に、楽しいあるいは安全な状況において新しい物事の見方を促進する傾向があり、寛大さや人を援助するプロセスを促進することが示唆されている(Isen、2000)。もとの自尊感情が低くポジティブ感情が低いメンバーに対しては、ポジティブ感情を高めるようなアプローチが求められるのだろう。また、Table3の相関分析結果からは「他者からの受容」とセッションの魅力度が関連しないセッションがある可能性がうかがえたが、Table2のt検定の結果からは、参加メンバーの「他者からの受容」は、初回と比べて最終回で高まっていることが明らかになった。グループ体験は非言語的なアプローチを含むため、消化して吸収するまで、感覚的に感じたことを言語に落とし込んでいくために少し時

間を要する可能性があり、その点については今後さらに検証が必要である。

3. 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート (EGSQ-R) が魅力度に与える影響について

EGSQ-Rの下位因子を独立変数、「魅力度」を従属変数とした重回帰分析の結果から、「自己理解・他者理解」と「グループの居心地」がセッションの「魅力度」に影響を与えていることが示唆された。一方、「関わり」や「他者からの受容」は「魅力度」に影響を与えていない可能性が示唆された。

花屋 (2004) は、大学生を対象とした1泊2日の集中的な構成的EGを実施し、その効果について自意識尺度とKiss-18で測定している。その結果、前半までは他者に対する尊重・傾聴度が他の項目よりも相対的に高いが、後半以降では一貫して自己発見度が他の項目よりも高く、自己発見が参加学生にとってEG体験の重要な一側面であったと考察している (花屋, 2004)。安心した場で自己理解を深めることがセッションの魅力度にとっては特に重要であり、メンバーの自己理解度はFacにとっても手がかりにしやすいバロメーターとも言えるだろう。

魅力度は総合的指標であり (坂中・高橋, 2009)、Facのその時のセッションに対する感じ方にとっても近いように思われる。メンバーのグループや他者へのコミットの仕方、そしてメンバーが他者からどう受け止められていると感じているかについては、メンバーにとってもFacにとっても一見わかりにくく、見落としやすい可能性がある。しかし、自己がより成長していくために必要不可欠な要素である。この見落としやすいと思われる「関わり」や「他者からの受容」については、特にEGSQ-Rで把握することができるという意義があり、その後の活動においてエクササイズの目的として明確に位置づけるなど、意識してサポートしていくことがグループ全体の成長度を高めることにつながるのではないだろうか。

4. 今後の課題

本研究においてはサンプル数が少ないことから、今後より多くのサンプル数のデータにより、信頼性・妥当性を検証することが必要である。

メンバーの中には他者と関わることは不安けれども克服してもっと関わりたいたいといった複雑な葛藤もあるかもしれないが、自己の内省に基づく評定や記述では、本人の言語化に依存してしまうため、書かれていないことについては推測していくしかない。

加藤 (2004) は、回想による自己報告式の質問紙の回答は、測定しようとする実際の状態や行動を正確に測定したものではなく、過去における状態や行動の影響をうけたものであると指摘している。

Isen & Erez (2007) は、従来の自己申告方式の尺度に関する問題について指摘し、自己申告方式に対する代替手段として断片的な言葉を完成させる方法などの、直接言葉で表現される以外のImplicit measuresについて提案している。グループ体験は非言語的なアプローチを含み、また感じたことを言語化していくには時間がかかる可能性がある。そのため、言語による自己申告方式以外の手段で効果を測定することも今後の課題であるだろう。

引用文献

- 安部恒久 (2010) : グループアプローチ入門— 心理臨床家のためのグループ促進法— 誠信書房
- 浅井千秋 (2020) : 参画型の半構成的グループ・エンカウンターが自己と他者に対する態度変容に与える効果 (1) — 効果測定のための尺度構成と信頼性および妥当性の検討— 東海大学紀要文化社会学部 (3), 61-80.
- 花屋道子 (2004) : グループ・アプローチと教員養成 — 自己と出会う体験の提供— 弘前大学教育学部紀要 教員養成学特集号, 55-63.
- 林もも子 (1990) : エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の重要性 心理学研究 61 (3), 184-187.
- Isen, A. M. (2000) : Positive affect and decision making. In M. Lewis, & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions*, 2nd ed. New York: Guilford Press, 417- 435.
- Isen, A. M., & Erez, A. (2007) : Some measurement issues in the study of affect. In A. D. Ong & M. H. M.

- van Dulmen (Eds.), Series in positive psychology. Oxford handbook of methods in positive psychology, Oxford University Press, 250-265.
- 加藤司 (2004) : 自己報告式によるコーピング測定の方法論的問題 心理学評論 47 (2)、225-240.
- 絹川友梨 (2002) : インプロゲーム—身体表現の即興ワークショップ— 晩成書房
- 絹川友梨 (2017) : インプロワークショップの進め方—ファシリテーターの考えること— 晩成書房
- 國分康孝・國分久子総編 片野智治編 (2004) : 構成的グループエンカウンター辞典 図書文化社
- 三浦文子 (2019) : 既知集団の大学生を対象とした授業での 構成的エンカウンター・グループに関する—考察—プログラムとプロセスの視点から— 文教大学人間科学研究、40、13-24.
- 三浦文子 (2020) : グループ・アプローチの技法の比較に関する—考察—応用インプロの視点から— 文教大学臨床相談研究所紀要、24、39-45.
- 水野邦夫 (2013) : 構成的グループ・エンカウンターにおける体験の測定—SGE体験評価尺度作成の試み— 帝塚山大学心理学部紀要、2、41-56.
- 水野邦夫・中地展生・吉田かける (2019) : 構成的グループ・エンカウンターへの魅力度に関連する要因の検討 帝塚山大学心理科学論集、2、1-8.
- 水島恵一 (1973) : 自己探求と人間回復—カウンセリングとTグループ— 大日本図書
- 村山正治 (1979) : 私のオーガナイザーとしての経験 九州大学教育相談室紀要、5、109-113.
- 村山正治・野島一彦・安部恒久・岩井力 (1979) : 日本における集中的グループ経験研究の展望 実験社会心理学研究、18 (2)、139-152.
- 中小路久美代・絹川友梨 (2015) : 即興演劇ワークショップのデザイン学的解釈の試み計測と制御 54、485-493.
- 野島一彦 (1982) : エンカウンター・グループ構成論 福岡大学人文叢論 14 (1)、1-32.
- 野島一彦 (1985) : グループ・Facの養成をめぐる九州大学心理臨床研究、4、99-105.
- 野島一彦 (2000) : 日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開:1970-1999 九州大学心理学研究、1、11-19.
- 小塩真司 (2018) : SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 第3版—因子分析・共分散構造分析まで— 東京図書
- 坂中正義・高橋紀子 (2009) : 改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート作成の試み 福岡教育大学紀要、第四分冊、教職科編 (58)、71-79.

付記

アンケートに協力して下さった参加メンバーの皆さま、CoFacを担当して下さったお二人に深く感謝申し上げます。

[抄録]

本研究では、構成的EGの参加メンバーの体験を把握するために、EGSQ-Rと自由記述、魅力度を測定した。本研究の目的は、(1) EGSQ-Rの因子構造を確認すること、(2) EQSQ-Rと魅力度との関連について明らかにすること、(3) EQSQ-Rが魅力度に与える影響について明らかにすることである。

結論として、以下のことが示された。(1) EGSQ-Rは「グループの居心地」、「自己理解・他者理解」、「関わり」、「他者からの受容」の4因子構造であることが示唆された。(2) 一部「他者からの受容」を除いてEQSQ-Rと魅力度は関連性がみられた。(3) EQSQ-Rの下位因子である「自己理解・他者理解」と「グループの居心地」が魅力度に影響を与えることが示唆された。
